

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

3

ウィーンのマラー

音楽院時代

師と仲間

(1874-1876)

《ミューズの住むところ、
わが欲望の国》

ウィーンへの道は思いがけず開かれることになった。イーグラウのギムナジウムでマーラーは彼よりも3才年上の少年と知り合ったが、彼はマーラーに劣らず音楽と文学に熱中していた。彼はイーグラウから数キロほど離れたハーベルンの商人の息子で、ヨーゼフ・シュタイナー⁽¹⁾といい、ピアノを習っていたが、おそらくマーラーと同じ先生についていた。しかし彼の好みは文学に、なかでもドイツ詩に傾き、後に彼はその教鞭を執ることになる。文学の見習いと音楽の見習いが会って話をすれば落ちつく先はオペラということになる。シュタイナーの方に手持ちの主題があったようで、ルートヴィヒ・ウーラントの劇詩『エルンスト・フォン・シュヴァーベン』をオペラ用の台本にする気だった。

そのころ、ヨーゼフの父であるイグナーツ・シュタイナーの親戚にダスタフ・シュワルツ⁽²⁾という、イーグラウの北方、チャスラウ近隣で、モラワンとロノウに近いところに位置するとある私有領の会計管財人が、その屋根裏部屋に、ジギスモント・タルベルクの未発表楽譜の草稿を発見するということがあった。シュワルツにはそれらの総譜を解読することなどできなかったが、大いに好奇心を刺激され彼のために演奏してくれる音楽家を募集していた。イグナーツ・シュタイナーがその彼に息子の友人の話をしたのがそんなときだった。息子と同じイーグラウのギムナジウムの生徒でピアノがうまくて読解力に優れているという話にシュワルツはその若者を呼びよせることにした。モラワンに到着したのは、何かぎこちない背の低い虚弱な少年だった。ところが少年がピアノの前に坐ると、その顔立ちが、それほど器量がよかったわけではないが、輝き出すのだった。そのぎこちなさはまるで魔法にかかったかのようにあっという間に消え去り、少年はその年齢にしては驚くほどピアノに熟練していて易々と演奏した。シュワルツにその未発表草稿を解読演奏してあげたあとでこの若者は彼自身の作品を演奏して聞かせた。なかでもとくに『エルン

148
(75)

*一般教育 助教授 フランス語

スト・フォン・シュヴァーベン』⁽³⁾からの抜粋はシュワルツに深い印象を与えた。たぶんこのときシュワルツは自宅で夏休みを過ごすようにとこの若者と友人のヨーゼフ・シュタイナーと一緒に招待することにした。1875年の夏、二人の若者はこうして彼らのオペラ計画に熱中してとりかかることができた。次第にマーラーの才能に魅了されたシュワルツはさらに音楽の勉強をする気がないのか彼に尋ねた。少年はそれ以上に大切な願いはありませんと答えた。ところが残念なことに彼は父親の反対をくつがえすことはできなかった。口を開けばギムナジウムの勉強を終えなければいけないという彼の父は、今のところウィーンでの音楽教育を彼に受けさせる気などこれっぽちもないということだった。ただシュワルツの影響はこの点に関して決定的に働いたようだった。

1875年8月28日付けのシュワルツに宛てたマーラーの手紙は私たちの知りうるマーラー自筆の最初のものである。「シュワルツさん、父がシュワルツさんに宛てた手紙、つまりぼくをこんなに頻繁に歓迎して泊めていただいたことに対するシュワルツさんへの感謝状ですが、ぼくはそれをうまく利用したいとずっと考えています。ぼくたちの計画を受け入れてもらえるように父を説得するためにぼくががんばらなければならないのは当然です(…)。父はぼくたちの考えにもうはっきりと傾いてきていますが、まだ完全には説得できていません。まるでビュルガーの『嵐の死霊の軍勢』⁽⁴⁾みたいに、父の左右の騎士が一人ずついて、それぞれが彼を引っ張り合っているのです。とはいいいながら、ぼくは勝つのは正義の騎士だと思っています。

『君だよ、ウエルナー、ぼくを助けてくれるのは』⁽⁵⁾

「父は、ぼくがギムナジウムの勉強をおろそかにしたり途中でほうり投げたりしやしまいか、ウィーンで悪い影響を受けやしないかなんて心配しているのです。もうぼくの方に傾いているとは思うのですが、落ち着き払った分別臭い人たちのもつあの権柄づくな態度にぼくがたった一人で挑みかかることなどできやしません、そのへんをご理解ください。9月4日の土曜日にシュワルツさんがいらっしゃるのを大いにあてにしています、だってシュワルツさんが一人いるだけで父を説得できるのですから。奥様によろしくお伝えください、それからロノウの人たちにも。」

初期のマーラーの伝記作家らには知られていなかったこの手紙は、ベルンハルト・マーラーが自分の息子の将来の職業について考えていたことを追認している。つまりベルンハルトはダスタフが中等教育を修了することを望んでおり、ウィーンでは親の監視が届かないので息子を首都に送るのは躊躇される。しかし逡巡はあったものの最終的に決心をしたのだから、そしてこの先彼にはそのために多大な犠牲を払わなければならないということを考えてみれば、彼に対して賞賛してもしたりない。実際ベルンハルトは腕一本でかちえた生活のゆとりを犠牲にして息子のたどる道を可能にした、他の多くの親ならば反対するところを。シュテファン・ツヴァイクの『昨日の世界』と題された回想録にこの問題について役立つ詳細な記述がある。「ユダヤ人の人生においてユダヤ人特有の典型的な目的は金持ちになることだとは一般に認められている。これくらい間違っただけのものはない。彼らにとって富とは中間点に過ぎず、真の目的に到達するための手段であり、目的そのものではない。ユダヤ人の本当の願望、彼らの内なる理想は、精神的に向上すること、より高い精神的水準に到達することだ(…)。

「この世の富の恩恵を最も受けていたとしてもユダヤ人は自分の娘を嫁にやるなら、商人よりも、たとえヨブのように貧しいものであっても才知に長けた賢い男の方にやるだろう。このような精神的なものの優位性は、どのような社会的地位にいようとユダヤ人の中に不変にあるものなのだ。どのような悪天候でも荷物を背負って地をほうように行かねばならない最も悲惨な行商人が、最もつらい犠牲を払いながら息子の一人に勉学を受けさせるのだ、そして思考力が明らかにぬきんでた人物——教授、学者、音楽家——が家族の中にいれば、それが家族全員の栄光の印なのだ、あたかもその人物の成功によって彼のみで家族全員が貴族にでもなったかのように高貴なものになってしまうのだ。」

アンドレ・ジークフリート⁽⁶⁾は以上の論拠を認めてつけ加える。「商売上手はユダヤの伝統にとってあとで得られたものに過ぎない。たとえそのユダヤ人が規律を厳格に守ろうとしないものでも、またユダヤ教の信者でなくても、ユダヤなるものを構成しているものの中に見出されるものはその文化的伝統、宗教的伝統なのだ。」これ以上にうまく、ベルンハルト・マーラーが自分の家族に知的な名声を得る道へ向けさせるために大いに示したねばり強さと情熱の理由を説明することはできない。まさしくそのことが、まったく凡庸な家柄に生まれたものにはほとんど表われてこない芸術的な能力、そういったものに対する彼の意識、敬意を明らかにする。

だからグスタフ・シュワルツがベルンハルトに息子のウィーン音楽院入学を決心させようと彼の影響力を行使したとき、ベルンハルトは形式的に反対しただけだったようだ。上述の手紙を受け取ってからシュワルツはイーグラウのベルンハルトのもとを訪ねた。ベルンハルトはシュワルツに息子をウィーンへ連れていってもらうために息子を彼に託すことに同意している。この点で、ユリウス・エプシュタインの話と異なっている。エプシュタインはマーラーの死後、この少年が父親に連れられて初めて彼のもとにやってきたと言っている⁽⁷⁾。おそらく老エプシュタインの頭の中で混乱が生じたと考えられる、マーラーがグスタフ・シュワルツに連れられて彼の前に姿を現した最初の訪問と、ベルンハルト・マーラーがこの著名な教授に少年の才能を保証してくれるのを自分自身の耳で聞くことに執着したもう一つの訪問の二つを混同してしまったのだろう。

2年後の1877年9月6日マーラーは再びシュワルツに手紙を書いている。「2年前ぼくはあなたとお知り合いになれてとてもうれしかった、そしてあれほど親切にぼくを受け入れ、過分なほどに援助をしてくれました。そのころぼくには海神ネプチューンが、そう、三極の矛先でぼくの運命の荒波を鎮めぼくの人生の船を港へと導いてくれた海神ネプチューンが、いつの日かぼくの態度について不平を言うだろうなどとは思いませんでした(…)。あなたのご尽力でぼくには一人の有力な友人がえられました⁽⁸⁾。彼は今でも相変わらず最大の好意と共感をもってぼくに対してくれます。ぼくにミューズの住むところの扉を開いてくれたのは、そしてわが欲望の国へと導いてくれたのはあなたです。だからどうして一瞬たりともあなたに対するぼくのなすべき義務を見失いましょうか、ぼくがいかに進歩し数々の難関を突破したかあなたにお伝えするのを忘れましょうか。そんなことはぼくにはとうていできようもありません。」同じ手紙でマーラーはシュワルツに父が彼の下宿を捜すためにウィーンに来たばかりだということを伝えている。そして音楽院の二年次を優秀な成績で終了したと言ってつけ加える、「ぼくがこの道を選んだことに間違いはなかつ

たのです、ぼくは先生方に満足しておりますし、もし神が望むなら、ぼくの噂をあなたは近々聞くことになるでしょう、ぼくにはそう断言できます。」この手紙の装飾過多な勿体ぶった文体はいくぶん彼の文学的な傾向を明かしている。少なくともそのメタファーの使い方は単純なものではない。結句については17才の少年がすでに自分の能力、使命をどこまで意識しているか示している。

おそらくシュワルツがイーグラウにきた1875年9月4日土曜日にグスタフのウィーン行きが決まった。有名なピアニストのユリウス・エプシュタインに彼を紹介し彼の才能と彼の将来についてエプシュタインに判断してもらおうということになった。この老巨匠はそれから30年後、この最初の出会いについて詳しく述べている⁽⁹⁾。当時彼はウィーンに近いバーデンで休暇を取っていた、そんなときイーグラウで酒を造っているベルンハルト・マーラーという人物が15才の少年を連れて会いに来るといふ知らせを受ける。「息子のグスタフは音楽家にどうしてもなりたいたいと言っております。正直申しまして、わたくしは息子を商業学校⁽¹⁰⁾か大学に入りたいのです、後々、家業を継がせるために、でも息子はこれっぽちも知っちゃいないのです」と哀しげな調子で訪問者は言った。エプシュタインはその若者を見ると、おどおどとした様子など全くなく、即座に《たった一人で自分の運命を切り開くことのできる》印象を受け、その表情に常ならざるものをすぐ感じとっていた。「では彼の将来をわたしが決定しなければならないのですか」と彼はその父親を観察しながら言った、「これは全く恐ろしい使命ですね。」そこで彼はその若者をピアノにつくよううながした。

数分後エプシュタインはグスタフの演奏を止めさせ父親の方に向かって、「マーラーさん、お宅の息子さんは生まれながらの音楽家です」と言った。ベルンハルトは驚き、いくぶん狼狽して答えた、「でも、先生様、たった今、若者の将来を決めるのは大変難しいと言ったばかりではないですか。ところが今や、息子の演奏を五分も聴かないで、もう判断できると先生はおっしゃるのですから。」「いやマーラーさん、私はあなたが思うほどうぬぼれの強い男ではないとまず言っておきましょう。この若者には才能があります、父親から受け継ぐべきお酒の才能ではありませんよ⁽¹¹⁾。」35年後の1911年になっても、エプシュタインは相変わらず、グスタフ・マーラーが彼に注いだ感謝の眼差しを忘れてはいない。

別の新聞⁽¹²⁾ではエプシュタインの話は少し違っている。マーラーが彼にピアノを聞かせたのは彼自身の曲だったようだ、当時の趨勢である《ワグネリアン》とエプシュタインには思われた⁽¹³⁾。そして《驚くべき記憶力》で古典曲を演奏した。シュワルツによれば、この有名な巨匠にはこのような神童の演奏を聞くために電報を打って彼をウィーンに呼び寄せなかったことのほうが驚くべきことだった、ということらしい⁽¹⁴⁾。オーストリアの著名な音楽家の一人をいとも簡単に征服したことは若きマーラーのキャリアには決定的なこととなる。エプシュタインの推薦によって彼は1875年9月10日ウィーン音楽院の学籍簿に登録されることになる⁽¹⁵⁾。ここに晴れて彼は三年間ウィーンで過ごすことになる、とはいっても父親の要望によりイーグラウのギムナジウムで学業を続けながらではあるが。

ウィーン音楽院は有名な《楽友協会》（一般に省略して《ムジークフェライン》と呼ばれる）の付属機関でウィーンで最も尊敬を集め最古の教育機関のひとつである。それまでウィーンになかった演奏協会、音楽学校、図書館といったいくつかの組織を首都に設けよ

うと1812年に創設された《ムジークフェライン》は1867年から1870年にかけて宮廷歌劇場から遠くないカールスプラッツに面したところに贅沢なネオ・クラシック様式の建造物を建てた。この巨大な建物にはいくつかのコンサート・ホールもあり、モーツァルトの有名な好敵手アントニオ・サリエリによって創設され1851年以来ヨーゼフ・ヘルメスベルガーが院長を務めるこの音楽院もこの建物の一部を占めている。学校施設の使用料が引き上げられたが、それは翌年マーラーがその分の免除を願い出ている理由になろう。しかしいくつかの奨学金が楽友協会の裕福な会員によって制度化されていてマーラーはそのひとつを利用することになる。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー・シニアは1851年から1893年までウィーン音楽院長を務めたが、彼は首都の伝説的人物であり、彼同様音楽家の二人の息子と区別するためにこの地では《老ヘルメスベルガー》と呼ばれている。この気のいいウィーン子は代々器楽奏者の家系の出身で⁽¹⁶⁾、当時50才で頬紅をつけグロテスクな鬘をかぶりフランツ・ヨーゼフ流の長い鬘をはやして若返ったつもりでいる。通りを向こうからやってくると、その大時代ななり、そのシルクハット、その銀の握りのついた杖、いくぶん滑稽なそのはずむ足どりだけでも彼とわかってしまうのだが、そんな《しゃれものの優雅さ》は、かの有名な批評家エドワルト・ハンスリックやヴァイオリニストのアルノルト・ロゼーの言うところでは、彼の演奏によく表れているという⁽¹⁷⁾。とはいってもヘルメスベルガーは巨匠として国際的な名声を博した、つまり宮廷歌劇場管弦楽団のコンサートマスターとして、演奏協会会長として、音楽院管弦楽団長として、とくに彼の名前をつけた弦楽四重奏団の第一ヴァイオリン奏者として。彼の最初の栄光の印の一つとして、1850年以来、プログラムにシューベルトやシューマンの弦楽四重奏、もちろんベートーヴェンの後期の四重奏をのせたことだ。後にはブラームスが彼に初演をいくつか頼んでいる。ある日には、彼の演奏を特に聴きにやってきた格別の聞き手、リヒャルト・ワーグナーの前でベートーヴェンの嬰ハ短調の四重奏全曲を演奏するというまたとない栄誉を得た。

このようにヘルメスベルガーは趣味の良さや見識にかけるなどということからほど遠い。彼には音楽の価値を見分ける確かなセンスも持ち合わせているが、軽薄で表面的という典型的なウィーン気質のため彼は非個性的で凡庸な指揮者であり、そして全く投げ遣りな室内楽の教授にさえ時にはなってしまう。エルンスト・デクセーはある日彼がムジークフェライン・ホールで彼の生徒から選んだ7、80人のヴァイオリニストの集団を相手に指揮しているところに居合わせたことがあった。彼らは全員ユニゾンで(!)《老マイゼーダー》の練習曲を演奏しているのだ。指揮しながらヘルメスベルガーはウィーンのマロディに揺すられているかのように椅子に坐って右に左に揺れているのだった、そして「ああ、わがヴァイオリン」と恍惚として叫ぶのだった。ときには作曲家にもなって『バレエの情景』と題したワルツ形式の小品の作曲もするが、この曲はパウリーネ・メッテルニッヒ侯爵夫人の慈善パーティーに見事なほどふさわしいものだった。この音楽家は伝統に頑固なほど執着しているので、音楽院の騒々しい若者たちに悩まされ眉をひそめるのも当然で、マーラーは《不服従》の廉でよく罰せられ、フーゴ・ヴォルフについては、あとでもう一度述べることになるが、全く単純に学則違反で1877年5月に退学になる。ある日音楽院で、

ながら《助けて!》と叫びながら逃げてくるところを目撃した、彼の前にはダントン・カラーのシャツを来た蓬髪の一匹の若者がいてどうやらヘルメスベルガーに対して凶暴なる怒りにかられているようなのだ。慌てたものだからこの誉れ高い院長は彼のシルクハットをとり落としてしまった、まさしくそれが象徴するように、そうやって彼の威厳の最後の光までも失ってしまった。この若き野獣こそ誰であろうフーゴー・ヴォルフその人であり、《凶暴な狼》とあだ名された和声学の学生で音楽院の教授たちの恐怖の的だった⁽¹⁸⁾。

気の良いウィーン子のヘルメスベルガーはつねに洒落のめしている。ヴァイオリニストのカール・フレッシュによると彼が好んで標的にするのは、ウィーン・フィル第一ヴァイオリン第一プルトの彼の後継者であるヤーコブ・グリュン、近眼の連中、そして何よりもユダヤ人だった。後にマーラーが彼のことを語るに軽蔑と嫌悪がこもっていたことは理解するに苦はない⁽¹⁹⁾。彼にとって幸いなことに、教授法や奨学金の授与に関する決定を下すのは12人の評議員であって、ヘルメスベルガーもその決定に従うのであり、彼一人が音楽院の管理責任を負っているわけではない。正規のピアノ学習は10年続けられる。最初の2年は初級、次の3年間で中級、上級が4年間で最後の年が名人級となっている。エプシュタインの推薦があったので、そしてまたそれ以前にも学習していたためマーラーはすぐに最後から二番目の段階、つまり上級の最上級クラスにはいる。《主要科目》として選択したピアノに加えてローベルト・フックスの和声学、フランツ・クレンの作曲法のクラスにも登録している。

最初の2年間マーラーの器楽学習は、彼を発見し彼を音楽院に入学させた偉大なるピアノ教授の指導と監視のもとにおこなわれる。この巨匠の影響は彼の音楽の進展に決定的なものになる。実際ユリウス・エプシュタイン(1832-1926)はシューベルトのソナタの編者であり、熱烈なモーツァルト信奉者で、彼のそういった趣味や好みは彼の時代を先駆けている。彼はブラームスの親友、礼賛者で、ブラームスがウィーンにやってきたとき彼の『ピアノ四重奏曲』を公演することで彼の作品の伝道者となった。生まれながらの教育者で当時の重要な音楽家はほとんどみな彼の生徒だった。モーツァルト、シューベルト、ブラームスに対してマーラーの耳を開いたのが彼だった。幸いこの古典的な三人はこの若者のワーグナー熱のバランスをとることになる。

このときからそしてマーラーの生涯にわたって深い尊敬と本ものの共感、その二つがマーラーとエプシュタインの関係を彩ることになる。マーラーに対する好意からエプシュタインは、他の学生なら許されるはずもない多くの不品行に目をつぶる。彼の生活では精神的な父親の役割を長い間演じることにもなる⁽²⁰⁾。そして逆に自分の息子リヒャルトの家庭教師として彼に迷わず息子を預けている。

マーラーの和声学の先生はローベルト・フックス(1847-1927)で、ヘルメスベルガーのようにあだ名を頂戴している、それは《セレナーデの狐》⁽²¹⁾というもので、彼が作曲した五曲の『弦楽のためのセレナーデ』のためだが、その最初のもの(作品9:1875)はすぐにウィーンで評判になった⁽²²⁾。フックスはオーストリア南部のシュタイアーマルク州のフラウエンタールで生まれ、17才のときウィーンに上京した。以来ウィーンで過ごすことになる。1875年音楽院教授に任命されたことで(1911年までの)36年間、はじめは和声学、後には音楽理論の他の関連学科の教鞭をとる。マーラーやフーゴー・ヴォルフばか

りか、たとえば、シベリウス、フランツ・シュレーカー、フランツ・シュミット、アレキサンダー・フォン・ツェムリンスキーといった何人もの有名な音楽家が彼の手を経た。フックスは（1894年から1905年まで）宮廷楽団のオルガニストに任命され、こうしてウィーンの音楽生活における重要人物の一人となる。1875年に音楽院教授に任命されたのは明らかにブラームスの影響力がものを言っている。とはいってもブラームスの友人の作曲家たちの誰もが彼の助力を得ているわけではない、イグナツ・ブリュル、ハインリッヒ・フォン・ヘルツォーゲンベルクなどは苦い経験を味わっている。でもブラームスはフックスの音楽を好み⁽²³⁾、新しい作品ができればすぐに彼と一緒に連弾で演奏することがよくあった。「彼の中にあるものすべてに気品があり、とても創意に溢れているので、いつもその喜びを感じてしまう」と後にブラームスはリヒャルト・ホイベルガーに言う⁽²⁴⁾。

フックスの模範としているのはシューベルトで、彼はその叙情、その巧みで大胆な転調、三拍子への嗜好を模倣した、だいたい成功したが、ほとんどパスティッシュになってしまうこともあった。さらに彼はブラームスから洗練された形式と書法を、そしてかなり複雑なリズムと小編成の室内楽⁽²⁵⁾を受け継いだ。さてマーラーは作曲についてはすぐに彼の師とは正反対の方向へと進み出すのだが、このフックスの特質は、その趣味の良さ、チャーミングなこと、手法をみだりに多用しないこと、そして優雅であると同時に発展性のある主題を扱う発想の良さにある。フックスも又エプシュタイン同様シューベルトの直系としてシューベルトの伝えようとするもの、つまり、素材から発せられる純粋な叙情、形式の再発見というものをマーラーにもたらしたこともまた事実だ。また形式の厳密さというシューベルトのメッセージもまた彼に伝えているが、この形式の厳密さは彼の生み出すことになる将来の交響曲にあっては、子供時代に記憶して受け継いだ様々な素材が渾然一体となること、彼自身の創意に基づいて主題を工夫するその豊富さ、この二つにバランスを与えることになる。フックスは彼の弟子であるマーラーについて後にこう言うことになる、「彼はとにかく学校をさぼりがちでしたが、彼には不可能なことなど何もありませんでした。」

このようにフックスのマーラーに及ぼした影響は、いわゆる厳密な意味での作曲法をマーラーに教授したフランツ・クレン（1816-1897）⁽²⁶⁾よりも大きなものだったことは大いにあり得る。ところでこの《老クレン》は銜学趣味の、そっけない無口な男、厳格で独善的な理論家というあまり御世辞にもいえない人物として記憶にとどまる、新バロック様式の29のミサ曲のほか数多くの宗教曲を書いた作曲家である。そのほか、クレンは音楽院で対位法と楽理を教え、彼の作曲クラスは正規の教育科目に含まれてはいない。それでもマーラーは入学時に受けた試験結果からこのクラスの受講を認められている。後に彼はこの教科で最優秀賞をいくつも受けることになる。彼の受賞は和声法や対位法の厳しい規律に彼が従うはずもないのだから注目すべきことだろう。

1875年の秋、マーラーが音楽院に入学したときの同級生には、後になって彼の生活に何らかの役割を担うことになる若い音楽家が何人かいた。その中の一人ルドルフ・クルツィツァノフスキーはすぐに彼の親友になる。彼よりも一才年上で1872年からヴァイオリンを勉強するために音楽院に入学していた⁽²⁷⁾。二人は一緒にクレンの授業を受け、マーラーはたちどころにこの外見は爽やかだが、しかし気難しい性格をした才能溢れる若い音楽家のことが気に入り、彼ら二人はしばしばお互いの熱狂をわかち合うことになる。後にマー

ラーは何度か彼に経済的な援助をあたえることになるが、彼の兄ハインリッヒ⁽²⁸⁾とはさらに親密な関係をむすぶ。彼は作家で才能溢れるというわけにはいかなかった。性格は弟よりもさらに暗い感じだったようだ⁽²⁹⁾。

フックスの和声学の教室でマーラーはクルツィツァノフスキーよりも才能のあるもうひとりの音楽家と知り合いになる、5年間彼はマーラーの親友でいよう。彼とはフーゴー・ヴォルフのことで、その荒々しい人の言うことを聞かない性格は上述したようにすでに現れている。そして最後にマーラーは他にもアントン・クリスパーという名の若いスロヴェニア人とアン・デア・ウィーン劇場の著名な俳優カール・マチアス・ロットの息子であるハンス・ロットと親しくつきあうようになるが、この二人は両者とも悲劇的な最期を遂げる運命にあった。ハンス・ロットは輝くような美しさの持ち主⁽³⁰⁾で、作曲家、オルガニストであり、即興演奏で名声をばくしマーラーに最期まで変わらぬ賞賛と愛情の念を抱かせた。

マーラーは当時フェリックス・モットルとも出会ったかもしれない。彼はマーラー同様当時最も有名な指揮者の一人となるのだが、マーラーよりも4才年上になる⁽³¹⁾。モットルはマーラーが入学した年に音楽院を卒業するが、彼が16才のとき学内にワグナー協会を創設した。マーラーは1877年に協会に入る⁽³²⁾。そして最後にフランツ・シャルク、彼はマーラーよりも3才若く、後にウィーン宮廷歌劇場でマーラーの副指揮者の一人になるが、やはり彼と同じ時期に学生であった。彼らはまもなく二人してウィーン大学のブルックナーの講座に足繁く通うことになりますます彼らは親密になる。またこの同じ時期に音楽院には将来のマーラーの義理の弟となる、アルノルトとエドワルトのローゼンブルーム（またはロゼー）兄弟がいることを指摘しておかなければならない。アルノルトはルーマニアの北部ヤッシーで生まれマーラーよりも3才若い。とはいっても彼は1875年から1876年にかけてマーラーよりも上級のピアノとヴァイオリンのクラスを受講している。またローベルト・フックスの和声学のクラスに二人で受けている。弟のエドワルトは1876年に音楽院に入学し、チェロの勉強をしながらエプシュタインのピアノのクラスを受けることになる。1878年マーラーが音楽院を卒業する前に作曲で一等賞を得た『ピアノ五重奏』のスケルツォを公演することになったとき、弦楽四重奏のチェリストは彼の妹エンマの未来の夫となるこのエドワルト・ロゼーその人だった。

(1) Josef STEINER (1857年4月29日-1913年4月)は、その後ウィーン大学で文学研究にいそむことになる(1875-1879)。何度もウィーンでマーラーと寝食をともにした。後に彼は法学を学びこの都会で弁護士事務所を開くことになる。マーラーとの交際は1879年以降全くなくなってしまったようだ。以下の情報はヨーゼフの息子のフェリックス・シュタイナーから得られた。彼はニューヨークの心理学者である。彼は1878年の日付のついた彼の父宛のマーラーのはがきと、『嘆きの歌』の詩の自筆原稿を所有している。彼によると彼の父は『アルゴナウテス』の台本も作成したらしい。《冒頭》で書かれたその詩を父の家で見たと記憶している。マーラーの手で書かれた次のような注記が台本のある一節の余白に書かれてあった、《『ワルキューレ』に似すぎだ》。

(2) マーラー生前の1905年8月6日の *Neues Wiener Journal* 参照。ここに引用されている二つの手紙はあらたに、シュワルツの孫娘によって *Neue freie Presse* (1924年4月3日) に公表された。現在はロサンジェルスにシェーンベルク学院所蔵。ベルンハルトの死後、1889年2月26日にマーラー家が出した《感謝公告》によると、ベルンハルトを治療した医師団の中にグスタフ・シュワルツという医師がいた。おそらく同名異人であろう。

(3) シュワルツの証言によってこれらのオペラの断片の日付が可能になる。これらはヨーゼフ・シュタイナーのオリジナル台本をもとに書かれ、マーラーの初期の作品と同じように廃棄されてしまう。しかし問題のオペラはシュワルツが主張している

ように、1875年に実際に《完了》したかどうかはかなり怪しい。後にマーラーが語るように若いころの作品はどれも完成せずに終わったのだから。

- (4) G.A.BRÜGER (1747-1794) ここに引用した『荒野の狩猟』といった有名なロマンティックなバラードの作者。
- (5) "Dazu musst du, o Werner, mir verhelfen."
- (6) André SIEGFRIED『イスラエルの道』
- (7) 1905年にシュワルツの記事と一緒に公表されたマーラーの二通の手紙の信憑性は疑問の余地はない。
- (8) おそらくエプシュタインのこと。彼は音楽院時代にマーラーに好意的な影響を与え続けていた。
- (9) *Illustriertes Wiener Extrablatt* (1911年5月19日)
- (10) *Handelsakademie* は商業を勉強するギムナジウムである。父親の事業で働くつもりでいる裕福な家庭の子息がおおむねここで勉強する。
- (11) ドイツ語の Spiritus の地口。「精神、才能」と「アルコール」
- (12) *Neues Wiener Journal* (1911年5月19日)
- (13) Gustav SCHWARZ. 上掲記事。
- (14) シュワルツによればエプシュタインはマーラーのピアノ演奏よりも彼の作品、その《ワグネリアン》な性格に魅了されたようだ。
- (15) 326番。
- (16) この息子であるヨーゼフ・ジュニアは後の1901年、ウィーン・フィルの指揮者としてマーラーに代わることになるバレエ指揮者である。
- (17) この点に関してはヴァイオリニストのKarl FLESCHの回想録 (Macsimilian, New York, 1958, p.22)、批評家Ernst DECSEYの回想録 (*Musik war sein Leben. Lebenserinnerungen*. 以下EDMと略す) を参照。マーラーの未来の義理の弟Arnold Roséは57年間ウィーン・フィルのコンサートマスターをつとめることになるが、ヘルメスベルガーの弦楽四重奏団を引き継いで、著名なロゼー弦楽四重奏団の創始者となる。
- (18) EDM, p.44
- (19) マーラーは彼の相談相手だったナタリー・パウアー＝レヒナーを相手に彼のことを何度も《羊》(つまり《うすのろ》) 呼ばわりすることになる。
- (20) ウィーン歌劇場の資料室に1903年1月27日付けのエプシュタインの手紙が残されている、これには歌劇場監督になった彼の教え子に女性の歌手を一人推薦している。
- (21) *Fuchs* はドイツ語で「狐」である。
- (22) 四番目のものは弦楽アンサンブルに二つのホルンが加わる。フックスの死後五十年の記念にロバート・パスコールは興味深い論文で追悼した。彼はフックスの音楽は再検討され時にコンサートにのせられる価値があると考えている。(The Musical Times, 1/1977, p.115)
- (23) 特に彼が出版社のジムロックに推薦した『ピアノソナタ第一番作品19』『ピアノ協奏曲第一番作品27』『練習曲作品31』『交響曲第一番作品37』や、『トラウムビルダー作品48』『セレナーデ第四番作品51』。
- (24) Richard HEUBERGER: *Erinnerungen an Johannes Brahms*, p.51
- (25) フックスは全体で40ほどの室内楽を作曲した。その大半が1895年以後に作られた、たとえば、6曲のピアノとヴァイオリンのためのソナタ、4曲の弦楽四重奏、2曲のピアノ四重奏、そしてクラリネット五重奏など。そして晩年には2曲のオルガンのための幻想曲、10曲のピアノのためのフーガ作品76 (1904) を作曲する。彼の作品には50ほどの歌曲、いくつかの合唱曲、その中の3曲はミサ曲、そして二つのオペラ『王の花嫁』(1889)『悪魔の鐘』(1892) がある。
- (26) PSM, GAM, AMMで言われているテオドール・クレンではない。
- (27) Rudolf KRZYŻANOWSKI (1859年4月5日-1911年6月20日)、ボヘミアのエーガー生まれ、ポーランド系の陶器商人の子息(クルツィツァノフスキーはショパンの母方の姓でもある)。1872年ウィーン音楽院に入学、ヴァイオリン、オルガン、和声学、ピアノを研鑽。後にハレ(1887-1889)、エルヴァーフェルト、ミュンヘンで楽長、プラハではムックの後継者(1892-1895)、ハンブルクではマーラーの副指揮者を務め、1898年から1907年までワイマール歌劇場の第一指揮者の職に就く。ワーグナー歌手のイーダ・ドクサートと結婚、マーラーより遅れること一月後の1911年6月20日に死去。
- (28) Heinrich KRAZYŻANOWSKI, 1855年2月9日生まれ、しばらくの間ドイツ語の教師をしていたことがあった。彼はシュテルンベルクやウィーンで長い間文筆業を糧としたがかなりつましい生活ぶりだった。*Im Bruch*と題された小説を書き、ロシアものの翻訳をいくつか出版した。
- (29) 1930年アルマ夫人によって彼女の夫の蔵書から発見された書簡の中にマーラー宛てのハインリッヒ・クルツィツァノフスキーの手紙が一通残っていた。
- (30) ブルックナーの弟子でロットの友人であるKarl Hubyはバイエルン王ルードヴィッヒII世にハンス・ロットは似ていると断言している(GAB, IV, 1,446)。
- (31) モットルは1897年すんでのところでマーラーに代わってウィーン歌劇場の監督になるところだったが、1907年マーラーの後を継ぐ。
- (32) クリスマスとクルツィツァノフスキーも一緒だった。